

提出日 2020年2月26日

氏名:田窪淑子

所属:生産技術研究所 5部 林憲吾研究室

学年または身分:修士1年

研鑽タイトル Research Title

アラビア半島・オマーンにおける文化財レスキュー:伝統家屋の建設技法に関する
フィールド調査と国際的研究動向の把握

渡航先 Visited Institution

マスカット及びサララ、オマーン国

渡航期間 Traveling Period

2020年1月8日—2020年2月13日

研修概要 Research outline

アラビア半島・オマーンにおいて消失の危機にある伝統的石造建築の保存・活用を目的とし、石工や住民への聞き取り調査や古い家の壁や原料採取地から石や土のサンプルを採取した。具体的な歴史的家屋の修復プロジェクトにも参加し、自分の研究の最終目的を再確認した。

また、土を使用した現代建築に関するシンポジウムにも参加し、オマーンの伝統建築がいかに現代に継承され得るかを考える機会を得た。

現地の人々と深くかかわることにより、建築の背後に潜むオマーンの人々の文化や考え方を肌で感じた。

研修先について About the laboratory visited

スルタン・カーブース大学(SQU)でオマーンの伝統建築の研究をしている Naima Benkari 先生に受け入れ教員となってもらった。ただし、研究室では研修は行わず多くの時間は個人でフィールドワークを行い、インタビュー相手等の紹介や大学の学生寮の手配等を先生にいただいた。

滞在は主に北部マスカットと南部サララだったが、フィールドワークは主にサララで行った。マスカット滞在中は、SQU 以外にソハール大学、German University of Technology in Oman(GUtech)も訪問した。

研修内容 What you learned

オマーンにおいて、北部マスカットに約 2 週間、南部サララに約 3 週間滞在した。

サララでは、オマーン南部の伝統組積造の建設方法を明らかにする目的で石工や現地の地理学者にインタビューを行い、材料となる石や土の採取地を訪問した。そして古い建物の壁と原料採取地から石や土のサンプルを採取した。採取したサンプルは今後強度試験や X 線分析を行う予定である。サララ滞在中は現地の女性に通訳と運転をお願いし、現地の若者の生活を垣間見ることができた。

1970 年代から人々が住んでいたと思われる地域において住民に聞き取り調査を実施し、血縁関係や土地所有の変遷を明らかにする計画もあったが、こちらはほとんど実現できなかった。住民一人一人に事前に連絡を取りインタビュー日時の約束をする必要があると忠告され、住民らへの紹介をお願いしたが繋いでもらうことができなかった。

また、サララでは Naima 先生らのプロジェクトである歴史的家屋の修復にも携わり、実測や所有者へのインタビューを行った。自分の採取した伝統的建築材料に関する分析をいかに生かせるかが課題である。

マスカットでは、受け入れ教員であるスルタン・カーブース大学の Naima Benkari 先生と建築材料の Mohammed Meddah 先生に自分の研究について話してフィードバックをもらうとともに、オマーンで採取した土や石の分析を同大学で分析できるかどうか話し合った。また、計画中であるスルタン・カーブース大学への留学についても同大学の国際協力課に相談した。

東京大学の OB の Mohsin Usman Qureshi 先生の働くソハール大学でも分析施設を見学し、スルタン・カーブース大学で分析をできない場合にお問い合わせできるかどうか伺った。また、GUtech では、現代土建築に関するシンポジウム及びワークショップにも参加した。同大学で現代建築に使用する土の分析を行っている Weyne Switzer 先生に自分の行っている土の分析について話フィードバックをもらった。

研修先で特に印象に残ったこと The most impressive thing(16)

今回、私の訪問先は申請時の計画とは異なりオマーンのみとなった。しかし、オマーンに約 5 週間という長期間滞在し現地の人々と過ごすことにより彼らの生活や文化、考え方に接することができた。このことに関し、印象に残ったことを 2 点取り上げたい。

一つ目は、国民に敬愛されたカーブース前国王の逝去だ。私がオマーンに到着した翌日の出来事で、その次の日から 3 日間は彼の死を悼む期間とのことで人々はほとんど外出せず、あらゆる機関や店舗が運営を停止した。追悼の儀とそれに続く王位継承の儀式に伴い主要道路が封鎖され、国内を移動することすら困難であった。

1970年に彼が王位に就くまでオマーンは長らく鎖国状態にあり、以降カーブース前国王の政策によりこの国は急速に近代化を遂げ、インフラが整備され教育が広く与えられるようになった。国民はこの発展を進めたカーブース前国王に非常に感謝しており、オマーンの進むべき道をはっきりと示し国民を導いてきた彼に、あらゆる世代の国民が信頼を寄せていた。それだけに彼の死は国民にとって大きな衝撃だったようだ。テレビでは彼の遺体が車で運ばれる様子を見ようと沿道に集まった人々が泣き叫ぶ様子が報道されていた。また知人の多くは SNS のアイコンをカーブース前国王の白黒写真に変更し、死を悼む投稿も目立った。

計画していたインタビューなどはキャンセルされることになってしまったのだが、この歴史的な瞬間を現地で過ごし人々の動揺と悲しみを肌で感じることはとても貴重な経験となったと思う。カーブース前国王は、近代化を進める一方で伝統や都市景観の保持を重要視していた。元遺産文化大臣であるハイサム現国王の下、今後オマーンの前国王の伝統家屋が尊重され維持されるべきものとしてより意識されることを期待する。

もう一つ印象的だったのは、南部サララで現地の女性に通訳や運転を手伝ってもらった約3週間の出来事だ。よくオマーンの人々は穏やかな国民性を持つと言われるが、約束の時間から数時間遅れて来ることや、英語を話さない方へのインタビューの日程調整を頼んでもしばらく話が進まないことなどがしばしばあり、苦労した。しかし、非常に暑い気候の土地では日中外出を控え夕方から活動が活発になる慣習があることや、家族との時間を非常に大切にするため週末は仕事の予定をあまり入れないことが分かり徐々に彼らとの付き合い方が分かるようになった。このことは、現在計画中のオマーンへの長期留学の際にも生かしていきたい。

※研修先でのご自分の写真を数枚添付してください。Please add your photos taken at the destination.



